
傭兵・アレックス

志藤慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵・アレックス

【Nコード】

N9430A

【作者名】

志藤慧

【あらすじ】

舞台は戦国乱世。元近衛隊長の剣士、アレックスは傭兵となって金欲しさに戦場を駆けずり回っていた。雇用先のある砦で、歩兵隊長と出会い、食事の席で話をする。そして、翌日。攻めて来る大軍に陥落寸前になる砦。アレックスのとった行動は……

そこは砦だった。

剣と剣がぶつかり合い、弓矢が交錯しては城壁から弓兵が落ち、敵の弓兵もまた倒れる。

いわば戦場だ。

そして、砦を守る騎士達の中に黒い鎧を纏い剣を振るう騎士がいた。

彼の名は―アレックス。死神アレックスと呼ばれているただの一傭兵である。

<傭兵・アレックス>

ここのを要塞に派遣されたのは、去年の冬からであった。

若き傭兵、アレックスは元々何処かの国の近衛隊長だったこともあることもあって、それを看板に金を稼いでいた。

そして今回の戦の報酬は金貨8枚。なかなかいい額だ、ということとで彼はここを選んだ。

戦争の最前線であるこの砦は当然、危険も多い。

ついさっきまで隣で飯を食っていた奴は首を刎ねられて、現在は土の中で眠っている。

アレックスはやれやれ、といった様子で誰も居ない座席を見た。

「どうした？新入り。」

そこに歩兵部隊の隊長が座り、アレックスに声をかけた。

「いえ、別に。ただ…最前線つても凄い場所だなと思っただけです。」

「ハハハ！まあ左遷先だし、そりゃ危険だつてあるさ。お前さんはどっから飛ばされてきた？」

「自分は傭兵です。本国の依頼掲示板を見つけて引き受けたに過ぎません。金貨8枚つて結構おいしいですからね。」

隊長はフン、と鼻で笑った。

「お前が、噂の傭兵か。若きにしてその力は無双っていう…」

「そんな噂が…大げさだなあ。」

苦笑いを浮かべつつアレックスはパンをかじった。

そのパンはボソボソとして、あまり美味しいものではなかった。

「お前以外に傭兵は10人くらい居たんだが、今日の戦で3人になつたみたいだぜ？しかも1人は手と足を失つてるって…」

「そりゃ彼らに運がないだけでしょ。もしくは腕が悪いとか。」

「だろうな。つたく、金がいいからつて危険な任務とも知れず引き受けるなんてホント、馬鹿みてえだ。死んじまったらなんにもなら

ねえってのに。」

隊長はぐい、と葡萄酒を呷った。

その目には悲しみのようなものが混ざっているのをアレックスは見逃さなかった。

おそらく、死んだ傭兵の中に知り合いでも居たんだろう。まったくそんな事くらいでいちいち悲しんでるなんて気楽なモノだと彼は心の中で嗤った。

「その…あれだ。ご愁傷様です。」

「ああ。お前も無茶なコトすんなよ…死神・アレックスっていったって、死ぬ時は死ぬんだからな。」

— そんな事わかっている

アレックスは立ち去る隊長の後姿を見て、そう思った。

七年くらい前だろうか。自分が初めて近衛騎士団に入った時、身近な人達がどんどん死んでいった。

幼馴染で同期だった兵卒も命を落とした。自分に剣を教えた師匠もまた、戦死してしまった。

いちいち悲しんでられない、と思ったのが5年前。アレックス、二十歳の頃だった。そうして25歳になるまでずっと、1人で戦ってきた。

だから、盟友の死など微塵も悲しくなくなった。

（そろそろ戻るか…）

アレックスは食器を持って立ち上がり、その場を立ち去った。

そして、翌日…

「敵襲！！敵襲っ！！」

けたたましい鐘の音とともに兵士達がそれぞれの持ち場につく。傭兵部隊は隊長の言葉通り、アレックスを含め四人しかいなかった。そして剣を持って出陣する。城壁からは弓を放ち、敵の侵攻を食い止めるが予想以上に動きが早かった。何人か城壁の中に入り、剣兵達が襲い掛かってくる。

（来るかっー！）

アレックスは剣を抜き、切りかかってくる兵士の腕を刎ね、次に向かってくる兵士は剣ごと眉間を斬りつけ倒した。明らかに旗色は悪い。

門をぶち破られ、敵がドツと攻めはいつてきた。

剣兵、槍兵、弓兵、武将…アレックスは斬った兵の数がやがてわからなくなるくらいに敵を殺していた。

血糊で斬れなくなった剣を捨て、死んでいる兵士の鞘から剣をもらい戦う。

（むう、この戦…負けるかもな。）

そうなると金貨はもらえなくなる。

ギリギリまで持ちこたえ、戦利品のある宝物庫から持てるだけ宝を持って帰ろう、とアレックスは考えた。

「うがっ！」

目の前の兵士の喉に剣を突き刺す。彼の鎧が赤く染まる。
ついに兵士達が城内へと侵攻してきた。

（まずい！陥落してからじゃ宝が持つて帰れなくなる！）

次は倒れている味方武將の鞘から剣を盗み、城内へと駆け込んだ。
城の中は乱戦状態。アレックスは迷うことなく、宝物庫のドアの前に立った。

「何だお前！早く戦場に戻らんか！」

見張りの兵はアレックスを見るなり、顔を歪ませ、怒鳴りつけた。

「……………悪いね。」

「何っ…ぐふっ…！」

見張りの兵を殺し、宝物庫をぶちやぶる。
予想通り、金貨があった。彼は金貨の箱をひとつ持ちさっさと砦から逃げ出した。

中には金貨が100枚くらい入っている。

城壁を抜け、近くの森に入った頃には誰も追ってくる者は居なくなっていた。

そして夕方―砦から剣の交わる音が止んだ。

「終わったのか…」

砦は陥落したのだろう。

自分に死ぬな、と言ってくれた歩兵隊長。そして傭兵達。

彼らも生きてはいまい…

砦の頂上に立つ敵国の旗が猛々しく、そして気高く翻っていた…その旗を見てアレックスは妙に虚しくなった…

傭兵・アレックス　　了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9430a/>

傭兵・アレックス

2010年10月15日23時55分発行